

富山大学令和元年度卒業論文

日本中のどこよりも熱く、かっこよく
——カターレ富山ゴール裏の応援文化——

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース 社会学分野
学籍番号 11610193 渡邊剛士

目次

第1章 問題関心.....	1
第2章 先行研究.....	2
第3章 調査.....	4
第1節 調査概要.....	4
第2節 カターレ富山について.....	5
第3節 カターレ富山ゴール裏について.....	5
第4章 分析.....	7
第1節 グループTについて.....	7
第1項 メンバー構成.....	7
第2項 グループTの雰囲気.....	7
第3項 他のサポーターとの関係性.....	8
第2節 グループTのメンバーの一日.....	9
第3節 グループTの応援について.....	11
第1項 応援の構成要素.....	11
第2項 他のサポーターから見たグループTの応援.....	16
第3項 応援の背景にある思い.....	17
第5章 3人のメンバーたち.....	22
第1節 グループTの熱きリーダー～中村さん.....	22
第2節 残り少ない時間の中で～藤田さん.....	25
第3節 ゴール裏が大切な居場所に～手塚さん.....	27
第6章 考察.....	29
第1節 グループTの内実―先行研究との比較―.....	29
第2節 グループTの存在がメンバーにもたらすもの.....	30
第3節 応援文化とその展望.....	31
参考文献・URL.....	33
巻末資料.....	34
図表一覧.....	
図1：富山県総合運動公園陸上競技場座割図.....	6
図2：横断幕.....	13
図3：Tシャツ.....	15
図4：スカーフ.....	15
表1：チャント.....	12
表2：横断幕.....	13

第1章 問題関心

1993年に日本プロサッカーリーグ（以下「Ｊリーグ」）が誕生し、日本のプロスポーツは大きな転換期を迎えた。その主軸にあったのは「地域密着」という概念である。教育的価値観や企業との結び付きが強かった従来の日本のスポーツ観とは一線を画し、「Ｊリーグ百年構想」という理念の元、地域社会を基盤とする豊かなスポーツ文化の醸成をＪリーグは目指してきた。

Ｊリーグが開幕したことで爆発的に広がったのが「サポーター」という新たな応援形態である。サポーターとは「熱狂的なサッカーファンや特定のクラブチームを支持している人」のことを指し、一般的にサポーターは「ファン」とは別の存在として区別されている（日本サッカー協会 2019）。そして多くのサポーターが応援しているのが「ゴール裏」と呼ばれる場所である（二宮 2004）。ゴール裏はサッカーゴール及びゴールライン後方にある座席一帯のことを指し、多くのサポーターがゴール裏で熱狂的に、一体となって応援を行っている。

地域社会に根付き、ゆかりのあるクラブを応援しているサポーターだが、彼らは一体どのような応援をし、またどのような文化を築いているのか。そしてその文化は彼ら自身のアイデンティティや地域社会にどのような影響を及ぼすのだろうか。富山県のＪリーグクラブ「カターレ富山」の応援をリードしている「グループT」のメンバーを調査対象に彼らが育んでいる応援文化について考察する。

第2章 先行研究

サッカーはヨーロッパや南米で発展し、それに伴いサポーターの応援文化も成熟していった。この節ではその中でもヨーロッパの応援文化に焦点を当てる。

ヨーロッパの応援文化の特筆すべきものが「ULTRAS (ウルTRAS)」である。ウルTRASとは「熱狂的なサポーター集団」を意味する。清水 (2001) によるとウルTRASは 1971 年のイタリア・ジェノアのサンブドリアというクラブのファンに起源を持ち、その後欧州各国や南米、アジアなど世界各地に広まっていたという。

フランスのウルTRASの内実について調査したボダン (2005) は、ウルTRASに関するいくつかの特徴を述べている。

1 つは「非常に強い地元愛・クラブ愛」である。仏のウルTRASは彼らの地元や街・クラブに対し極めて強い愛着を持っている。彼らはバッジや幕に地方や街の紋章を描きだしたり、「マルセイユ人としての誇り」や「いつでもボルドー人」といった言葉を掲げることによって地域への愛着心や帰属心、さらにはクラブとしての成功を表現している。そして「キックオフの 1 時間前からゴール裏に陣取り、自分たちのテリトリーを横断幕で覆い、マイクを持つリーダーが歌をリードする」「選手がピッチに現れたり、ゴールが決まると強烈な歌と花火、さらにチームカラーの発煙筒や爆竹が目くらませる」といった過激で熱狂的な応援を行うことでクラブや選手を鼓舞する。自らを地方に、街に、そしてクラブに完全に同一化させ、熱狂的な応援を行う存在こそがウルTRASだと言える。

そしてもう 1 つは「組織的で階級的な内部構造」である。メンバーには地位や役職があり、各々が与えられた役割を果たしている。「会長」や「会計係」、「施設責任者」といったグループ全体を統括するような役職や、歌の指揮責任者、グループに指示を与える「メガフォン役」など応援に関係する役職、「喧嘩リーダー」や抗争の撮影係など暴力行為に関する役職など様々な役職が存在する。またヒエラルキーも厳格であり、特に若者のメンバーは古参のメンバーに対して強い尊敬の念を抱く。彼らに認めてもらうために、あるいはメンバーの中で目立った存在となるために若者のメンバーは自らの存在を積極的にアピールしなければならない。

組織的で階級的という内部構造やメンバーの中でも目立った存在でありたいという意志、横断幕や発煙筒などによる座席のスペクタクル化などの行為は一見すると別々の目的の元成り立っているように思われるが、ボダンによると上記の行為には共通した「論理的な目的」があるという。それは「スタンドで領土 (テリトリー) を確保する」という目的である。スタンド、つまりゴール裏の中に自分たちのグループの領土を獲得するということだが、ここから示唆されるのが「敵」の存在である。『『敵対する異文化への反応』が『ウルTRAS』を形成し、絶えず他のグループと比較し、自分を目立った特殊な存在にしようとする』というボダンの語りにもある通り、ウルTRASには常に敵対関係が存在している。相手サポーターや警察、さらには自チームの他のサポーターグループなど様々な敵対関係の中で、ウルTRASは自分たちこそが特別で、優れた存在であることを誇示しようとする。その意識が「スタンドで自分たちのテリトリーを確保する」という行為に繋がるのである。その際頻繁に使われるのが「暴力」である。敵を襲撃し、バッジやヘルメットなど敵が身につけているものを奪い取ることで自分たちの強さを見せつけ、その「戦利品」を事務所などに飾ることでグループの栄華を誇り続ける。グループ内では常に自分たちを高く評価し、グ

ループ外は「敵」とみなしこき下ろす。このような状況の中でウルTRASは、排他的な一体感を作り出し、非常に強い結束で結ばれるのである。従って海外のウルTRASは、クラブに対する深い愛情と、敵に対する強い敵対心という2つのベクトルを持ち合わせていると言える。

以上、海外のウルTRASの特徴について述べたが、本研究の調査対象である「グループT」も同様に「ウルTRAS」として応援を行っている。しかし海外と日本とでは社会や文化、さらにはサッカーを取り巻く環境が大きく異なっているため、同じ「ウルTRAS」と言えど海外のウルTRASとグループTとではグループとしての性質に違いがあることが考えられる。次章からは、グループTのグループとしての性質、そして彼らが行う応援の様相について分析していく。

第3章 調査

第1節 調査概要

本研究ではグループ T が育んでいる応援文化について明らかにするために、グループ T のメンバーを調査対象に、インタビュー調査やフィールドワークを行った。調査概要は以下の通りである。なお、本論文で記載されている人名は全て仮名である。

<インタビュー>

①中村さん（仮名）

(1)日時：2018 年 11 月 17 日（土）23：00～

場所：アウェー秋田へ移動中の車内

(2)日時：2019 年 8 月 13 日（火）17:30～

場所：スターバックスコーヒー マリエとやま店

(3)日時：2019 年 10 月 15 日（火）20：30～

場所：それぞれ自宅（通話）

(4)日時：2019 年 11 月 20 日（水）20：00～

場所：それぞれ自宅（通話）

②藤田さん（仮名）

日時：2019 年 12 月 3 日（火）20:15～

場所：それぞれ自宅（通話）

③手塚さん（仮名）

日時：2019 年 12 月 2 日（月）16：30～

場所：富山大学中央図書館 2 階

④山口さん（仮名）

日時：2019 年 12 月 16 日（月）21：00～

場所：スターバックスコーヒー 富山藤の木店

<フィールドワーク>

2018・2019 明治安田生命 J3 リーグ・カタレ富山の公式戦においてフィールドワーク調査を行った。その内容はグループ T のメンバー及びゴール裏のサポーターの応援方法の観察やメンバーの諸活動への同行等である。

分析に入る前に、筆者とグループ T との関係性について述べる。

筆者はカタレ富山のサポーターである。大学 2 年生の時にカタレ富山の試合に足を運び始め、大学 3 年生の頃からゴール裏で応援するようになった。そして 2019 年の夏ごろにグループ T に加入し、今ではグループ T の一員として応援を行っている。

筆者がグループ T と初めて接触したのは 2018 年の 10 月末に鹿児島で行われた鹿児島ユナイテッド FC

戦である。それ以前からグループ T の存在は知ってはいたものの、正直な所グループ T に対しては距離感を感じていたため、ゴール裏にはいてもグループ T の近くで応援することはなかった。しかし本研究を有意義なものにするために、グループ T のメンバーへの調査が必要不可欠であったことから、初めてメンバーに接触し調査依頼を行ったのが先述した鹿児島戦であった。

それまで感じていた距離感とは裏腹にグループ T のメンバーは筆者を暖かく受け入れてくれ、また調査の中でメンバーと行動を共にするうちにメンバーとの親睦も深まっていった。そして調査以外でも時間を共有することが多くなり、2019 年の夏ごろにはグループ T の一員として応援するようになった。

第 2 節 カターレ富山について

カターレ富山は J リーグに加盟しているプロサッカークラブである。2007 年に発足、2008 年に JFL（日本フットボールリーグ）に参入し、2009 年に J リーグに加盟した。2009 年から 2014 年までは J2 リーグに、2015 年以降は J3 リーグに所属している。

運営会社は株式会社カターレ富山で、富山県全域をホームタウン、富山県総合運動公園陸上競技場をホームスタジアムとしている（カターレ富山 2019）。

第 3 節 カターレ富山ゴール裏について

カターレ富山のゴール裏は一階と二階に分かれている。二階は一般的なベンチ型の座席で、一階は芝生席となっている。二階ではグループ T のメンバーが中央に陣取り、それを取り囲むようにして他のサポーターは応援を行っている。全体のサポーターの数はおよそ 130 人ほどで、その 7.8 割が男性である。全体的には 30 代・40 代の中高年のサポーターが多いが、グループ T の場合 10 代・20 代の若いサポーターが中心である。一階には 60～70 人ほどのサポーターが応援している。二階とは対照的に女性や高齢者のサポーターも目立ち、また塊ではなく個人あるいは小グループに分かれて応援を行っている。二階ではグループ T を中心に熱い雰囲気、一階では二階に比べて穏やかな雰囲気が形成されていると言える。

（図 1：富山県総合運動公園陸上競技場座割図）



カタレ富山 (2019) より引用

先述した通り現在ゴール裏ではグループTが応援をリードしている。チャントやコール（応援歌）の考案や横断幕の製作、そして試合中に歌うチャントの指示や楽器の演奏などを行っている。しかしグループTが発足する以前にもいくつかのサポーターグループは存在し、それぞれがゴール裏の応援をリードしてきた。サポーターグループの変遷については以下の通りである。

- ①グループH（2008年～2012年）
- ②グループK（2013年）
- ③グループなし：‘ピンサポ時代’（2014年・2015年）
- ④グループT（2016年～）

現在「グループK」は解散している。また「グループH」は存続こそしているものの、試合中の応援のリードはグループTに完全に移行しており、現在は備品の提供や応援メッセージの募集など、経済面・運営面でのサポートを行っている。

第4章 分析

第1節 グループTについて

第1項 メンバー構成

「グループT」は2016年に発足し、それ以後ゴール裏の応援をリードしている。また第2章で述べた「ウルTRAS」として応援を行っている。

メンバーは約20名ほどで、全員が男性である。年齢層は大きく分けて①40代、②20代半ば～30代前半、③10代～20代前半の3つの年代に分かれている。後に記述するが、①40代のメンバーはわずか数人であるため、グループTの年齢層は非常に若い。ここでは40代のメンバーを「古参」、20代半ば～30代前半のメンバーを「中心」、10代～20代前半のメンバーを「若手」と記述することとする。

古参のメンバーは数人しかいない。彼らは長らくカタレ富山を応援しており、またかつてグループT・Kで応援をリードしていたり、別のJリーグクラブで応援の中心として活躍した経験を持っているため、応援に関する経験や知識は豊富である。そのため中心や若手のメンバーにとっては非常に頼りになる存在となっている。古参メンバーは先頭に立って応援することはないが、グループとして何か窮地に陥った時、メンバーにアドバイスを送ることが多々ある。

中心のメンバーは約5名である。彼ら全員がグループTの発足メンバーであり、その名の通り応援の中心的な役割を担っている。応援のリーダー的な立ち位置である「コールリーダー」は中村さんが、太鼓を叩いて応援のリズムを作る「楽器隊」は山口さん、武藤さん、上村さんが主に担当している。また試合以外の役割に関しても、人集めの戦略については中村さんが、横断幕の考案・製作は山口さんが、チャント集やSNSでの告知用画像の製作などデジタル関連の作業については武藤さんが主に担っている。中心メンバーがゴール裏で共に応援するようになったのは2014年、彼らが大学生のときである。カタレ富山を応援し始めた時期や応援する位置は最初はバラバラであったが、アウェーでの試合に遠征に行くようになったり、あるいは中村さん、山口さん、藤田さんの3人が高校の同級生ということもあって、自然と彼らで固まって応援するようになった。そして2016年、彼らを中心に「グループT」を結成し、ゴール裏の応援をリードすることになった。

若手のメンバーは約10名である。その半分ほどが大学生で、彼らの多くは中高生の頃から熱心にカタレ富山を応援している。一方でここ数年で新たにグループに入ったメンバーも数多く存在し、その年齢層は中学生から社会人まで様々である。試合中は中心メンバーの周りを囲むように陣取り、その若さを生かして絶えず声を出し、飛び跳ね、手を叩いて熱く応援している。若手メンバー同士も親密な関係性を築いており、若手だけでアウェー遠征に行くこともしばしばある。

第2項 グループTの雰囲気

グループTの雰囲気として、まず「自由な規律」が挙げられる。グループTは入会費や年会費、会則といったルールを設けておらず、「最低でも○試合は足を運ばなければならない」「若手は絶対に準備に参加しなければいけない」といった決まり事も存在しない。これについて中村さんは「がつつにルールを決

めてしまうと応援に義務感を感じてしまう」からだと言った。

加えて中村さんは「応援は遊びの延長線上のようなもの」だと語る。スタジアムでは試合以外の時間も行動を共にし、サッカーの話やサッカーとは全くない話をするなどして盛り上がる。またアウェーゲームへの遠征も行い、会場までは同じ車に同乗するなどして向かう。遠征は「同年代でわちゃわちゃしながら楽しむ」というノリであり、遠征で起きた出来事やハプニングは「〇〇事件」という名称でメンバー間で思い出として共有されている。また試合中やそれ以外の役割についても強制・固定されているわけではない。上述した中心メンバーの諸役割は各々が自発的に行うようになったものであり、また役割を担う意志さえあれば誰でもコールリーダーや楽器隊といった役割に挑戦することができる。中村さんは「楽しいようにやるのが一番」と語っており、グループTの中には上記のような「遊び」の雰囲気組み込まれていると言える。

先行研究で海外のウルTRASは暴力性を帯びていると述べたが、グループTの場合暴力とは完全に無縁である。中村さんは「別に暴力的になる必要はない。海外と日本のウルTRASとだったら文化も全然違うしね」と語っており、日本の文化やサッカーを取り巻く環境を考慮すると暴力的になる必要はないと考えている。

しかし試合中になると、娯楽的な「遊び」の要素は一気に減少し、熱狂的で緊迫感のある雰囲気で充満する。メンバー全員の目の色が変わり、前のめりになって選手を応援する。極めて狭い範囲に密集しお互いの体を密着させ、お構いなしに椅子の上に土足で乗り上がる。試合中は絶えずチャントを歌い続け、飛び跳ね、手を振り続ける。盛り上がりが最高潮に達すると、服を脱いで上半身裸になったり、最前列の手すりに体ごとまたがって、喜びの感情を爆発させたりする。また審判が不可解なジャッジをしたり、相手選手が悪質なファールを行った場合は物凄い声量でブーイングを浴びせる。選手たちが不甲斐ない負け方をしたときなどは、その矛先がカターレの選手に向けられることもある。試合終了後はほとんどのメンバーは声が枯れ、また楽器隊のメンバーの手には血豆ができる。グループTのメンバーはこのように喜怒哀楽を表出しながら全身全霊で応援を行っているのである。

「遊びのノリ」と「本気のノリ」、この2つが共存した雰囲気をグループTは形成していると言える。その中でメンバーは、楽しく、熱く応援を行っているのである。

第3項 他のサポーターとの関係性

この項ではグループTとグループT以外のサポーターとの関係性について述べる。

グループTは仲間内で楽しく、熱く応援しているが、決してメンバー以外のサポーターと接点を持っていないということではない。メンバーと近い関係性のサポーターも多く存在する。

その一例が女性サポーターである。この場合の女性サポーターとは、グループTと親密な複数の女性サポーターのことを指す。彼女たちはグループとは言わないまでも、スタジアムでは固まって行動していることが多い。彼女たちは常にメンバーと行動を共にしているわけではないが、試合中はグループTの近くで応援したり、場所によってはアウェーの会場までグループTの車に同乗して向かうなどして親しい関係性を築いている。その他にもかつてグループHやグループKで応援をリードしていた昔からのサポーターや、個人的にメンバーと関わりのあるサポーターなど、メンバーと接点を持つサポーターは数多く存在す

る。

グループ T は男性中心で、年齢層は若く、また応援スタイルも熱狂的である。よって性別や年齢、応援スタイル、応援に対する価値観などからグループ T のメンバーとそれ以外のサポーターという構図が発生するのも無理はないだろう。しかしメンバーは他のサポーターを拒絶することは一切なく、同じクラブを共に応援する仲間としての関係性を構築していると言える。

第 2 節 グループ T のメンバーの一日

本節ではホームゲーム開催日のグループ T メンバーの一日の動きや他のサポーターの動向について記述する。

①幕張り

メンバーは試合開始約 3 時間半前にスタジアムに集合し、その後「幕張り」という作業を行う。「幕張り」とはゴール裏に横断幕を張っていく作業であり、メンバーや他のサポーターが協力して大小様々な約 20 個の横断幕を張っていく。横断幕はスタジアム内の倉庫に保管されている。横断幕の上部と下部には複数の紐が付いており、紐を手すりや重りに括り付けることで横断幕を張り付ける。幕張りは中村さんや山口さんなど中心メンバーの指示の元行われ、約 30 分で全ての幕が張り終わる。

②バス待ち

幕張りが終わると、メンバーは自由な時間を過ごす。ビール片手に宴会を始めたり、笑い話をしたり、スタジアムを散策してスタジアムグルメを頬張ったり、サッカーをしたり。そして試合開始 2 時間前になると、選手を乗せたバスがスタジアムに到着する。サポーターが選手バスを出迎える行為は「バス待ち」と呼ばれ、メンバーや他のサポーターはチャントやコールを歌いながら到着した選手を鼓舞する。バス待ちの時に歌われるのが「俺たちの誇り」というチャントである。「カターレ富山 俺たちの誇り 愛するこの気持ち もう止められない」という歌詞の通り、サポーターのカターレ富山に対する愛情を選手たちに全力でぶつける。試合さながらのテンションで応援は行われ、選手全員の姿が見えなくなるまでチャントやコールは歌われ続ける。

③ピッチ内練習開始

試合開始約 1 時間前になると選手のピッチ内練習が始まるため、メンバーやサポーターは再びゴール裏に集結する。最初にゴールキーパーがピッチ内に姿を現す。ゴールキーパーは練習を始める前にメイン席→ゴール裏の順にファン・サポーターに挨拶を行う。サポーターはそれに拍手で迎え、その後に選手コールそしてその選手のチャントを歌う。その後フィールドプレイヤーが入場した際も同様の形で応援を行う。全員分の選手コール・チャントを歌い終えた後は、監督へのコールが行われ、そこで一応援は一旦終了となる。

④試合開始直前

試合開始直前になると「立ち上がって歌おう」というチャントが歌われる。キックオフ直前という状況と、「立ち上がって歌お Oh 俺たちは富山 ララララ」という歌詞がシンクロし、サポーターのボルテージは一気に高まる。

選手入場時は決まって「威風堂々」というチャントを歌う。サポーターは自身の持つタオルマフラーを両手に広げ、上に掲げる。またゲートフラッグ（両手で持つ旗）や旗を持っているサポーターはそれらを掲げる。最初はゆったりとしたテンポで歌われるが、選手の姿が見えた途端にテンポが上がり、サポーターはタオルマフラーやフラッグを回し始め、ピッチに入場する選手を鼓舞する。選手の円陣の際にはスタジアム DJ によるカターレ富山コールが行われ、スタジアムの一体感は最高潮に達する。

⑤試合中

試合中メンバーは狭い範囲に密集して応援を行う。メンバーの姿勢は大体半身で、土足のまま椅子に乗って応援するのが基本的なスタイルである。試合中の応援の役割は主に次の3つに分かれている。

1つ目は「コールリード」である。試合の展開や時間帯によって、歌うチャントやコールの種類・タイミングを決める。試合中は常に「トラメガ（拡張器）」を持ち、応援の指示を出したり、周りのサポーターを煽ったりする。コールリードする人物は「コールリーダー」と呼ばれ、応援のリーダー的な立ち位置を取る。主に中村さんが担当している。

2つ目は「楽器隊」である。楽器は「太鼓」と「スネア」の2種類がある。楽器隊は3～4人から成る。太鼓のリズムがずれると応援そのもののリズムが不安定になるため、試合中はお互いが常に息を合わせて太鼓を叩かなければならない。これは主に山口さん、武藤さん、上村さんが担当している。

3つ目は「煽り」である。煽りは主に若手のメンバーが担当し、試合中は誰よりも声を出して応援し、またチャンスや失点した時など応援の熱量を上げたいときには、周りにいるサポーターに向かって「皆で声出そう！」と言ったり、身振り手振りを使ってより大きな声を出すようサポーターを煽る。その際一人だけが中村さんと同様トラメガを持つことができるが、これは主に藤田さんが担うことが多い。

メンバーはこのような形で役割を分担しながら熱く、一体となって応援を行う。そしてメンバー以外のサポーターは、グループTのリードに従って応援を行う。

以下では試合展開に応じたメンバー及び他のサポーターの応援の様子について記述する。

(通常時)

チャンスでもピンチでもなく、両チームがせめぎ合っている時間帯は、チャントが歌われ続ける。チャントが歌われない時間帯もある。

(チャンス時)

チャンスになったとき応援の熱量は格段に上がる。楽器隊は太鼓をより強く、ピッチを上げて叩く。また中村さんはトラメガを使ってチャントの一節を歌ったり、両手を大きく広げるなどして、より大きな声で歌うようサポーターを煽る。他のメンバーも同様に周りのサポーターを煽る。

チャンスになると攻撃専用のチャントが歌われることが多い。Nさんがオーーと言い始め、それに続い

てサポーターも「オー——」と続く。「ドン ドン ドドドン ドドドドン」という太鼓のリズムの後、一斉に「富山！」と叫ぶ。敵陣に攻め込むにつれてテンポは早くなり、チャンスが終わったと同時に応援は終了する。

(得点時)

ゴールが決まった時は、ハイタッチやハグをするなどをして喜びを分かち合う。ゴール後すぐに「アイーダ」というゴール専用のチャントが始まる。その後はゴールを決めた選手の選手コール・チャントが歌われる。

このとき N さんや楽器隊のメンバーは過度に喜ぶ様子はあまり見せない。応援をリードする上で気を引き締め直している様子が伺える。

(ピンチ時)

ピンチのときによく行われるのが「ブーイング」である。メンバーは激しいブーイングを行い、ボールを持っている相手選手に対して圧力をかける。またカターレコールが行われることも多い。

ピンチのときには他のサポーターの勢いや声量はやや下がるが、メンバーのそれは変わることはない。ピンチになっても全力でチャントやコールを歌い、選手を後押しする。

(失点時)

失点した瞬間は一瞬静寂に包まれるが、すかさず中村さんはカターレコールを始める。楽器隊も太鼓を強く叩き、「選手が苦しい状況のときこそ皆で応援しよう」というメッセージを発信する。そして他のメンバーやサポーターも応援を再開する。ただこの時もピンチ時と同様、メンバーと他のサポーターとの熱量の差は大きい。

⑥試合終了後

試合が終わるとメンバーは横断幕の撤収作業を行う。横断幕は外したのちに綺麗にたたみ、3つほどの大きなプラスチック製の箱の中にしまう。そしてその箱をスタジアム内の倉庫に保管して撤収作業は終了となる。片付けはメンバー全員で協力して行う。

その後メンバーはバス待ちが行われた場所へ移動し、雑談を楽しんだり、その日の応援の振り返りを行うなどして時間を過ごす。その時間は試合が終わってから約 45 分後に選手バスがスタジアムを出発するまで続く。選手バスを見送った後、メンバーは解散となる。

第3節 グループ T の応援について

本節ではグループ T が行う応援について分析する。

第1項 応援の構成要素

本項では、①チャント、②横断幕、③ファッションというグループ T の応援に欠かすことのできない3つの要素について述べる。

①チャント

グループ T のチャントは約 10 個存在し、試合展開や時間帯などによってそれぞれ使い分けられている。

グループ T のチャントの特徴は、世界中で歌われているサッカーソングを原曲に用いているチャントが非常に多いという点である。チャントとはある原曲に独自の歌詞を載せたもののことを指すが、グループ T の場合その原曲に世界中で歌われているチャントやサッカー日本代表・J リーグで使われているものを多く用いている。以下はその一例である。

(表 1：チャント)

チャント名	使用している主な国・クラブの例
①GO-WEST	世界中
②エンターテイナー	世界中
③アイーダ	日本代表
④バモ富山	日本代表
⑤戦え富山	ボカジュニアーズ（アルゼンチン）
⑥背中	ボカジュニアーズ（アルゼンチン）
⑦バモバモ	ボカジュニアーズ（アルゼンチン）
⑧奪取	イングランド
⑨威風堂々	浦和レッズ・ヴァンフォーレ甲府
⑩ブラジル	F C 東京・清水エスパルス

表 1 のように世界中で幅広く歌われている「GO WEST」や日本代表の応援でお馴染みの「アイーダ」、ボカジュニアーズ（アルゼンチン）という世界的に有名なクラブのチャントを原曲を使っている「戦え富山」や「背中」など、世界中のサッカーソングを基に作られたチャントが非常に多い。

J-POP の流行りの歌やアニメの主題歌をチャントに用いているクラブもある中、グループ T が世界的なサッカーソングをチャントに用いる理由として中村さんは以下のように語る。

インターナショナルスタンダードな曲入れた方がいいよね。皆が知ってる世界中で知られているサッカーソング。それがサッカー文化だと思うから。日本の歌を入れるよりもそっちの方が先決じゃねー？サッカーを応援してるんだからサッカーの歌入れねーと、サッカーばくならないと思うんだわみたいな感じ。

以上の語りから、中村さんは「サッカー文化」というものを強く意識していることが分かる。サッカーというスポーツの応援をしている以上、世界中のサポーターが歌っているようなチャントを歌い、より「サッカーっぽい応援」をしたいと中村さんは考えている。

②横断幕

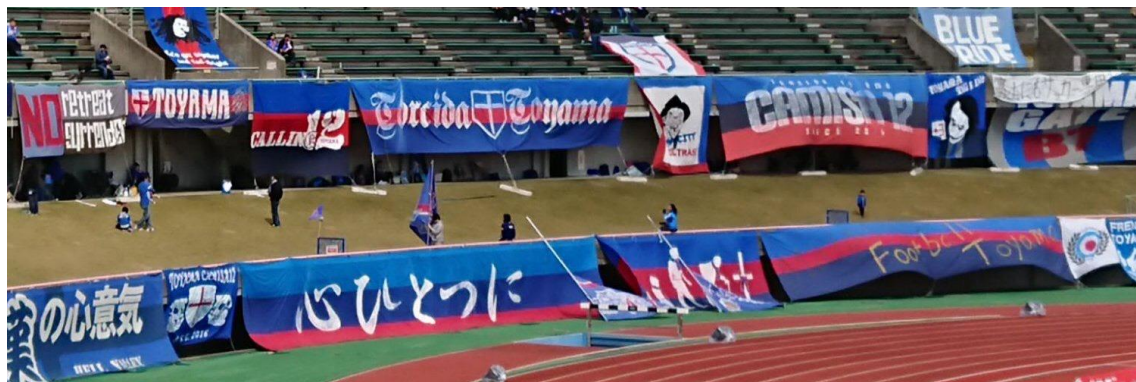
横断幕には「チーム幕」と「選手幕」の２種類があるが、チーム幕はグループTが、選手幕はサポーターが個々で管理・所有しているため、ここではチーム幕についてのみ記述する。横断幕の数は約 20 個ほどであり、縦 2.5m・横 14mの大きな幕から縦 2m・横 6mの小さな幕までその大きさは様々である。

横断幕にはそれぞれ呼び名がある。それぞれの呼び名と幕の内容、そして実際の横断幕の様子は以下の通りである。

(表 2：横断幕)

呼び名	内容
① (グループ名)	グループの名前の前半部分
② (グループ名)	グループの名名の後半部分
③エンブレム	グループTのエンブレム
④心ひとつに	「心ひとつに」という文字
⑤まいどはや	「Maidohaya Football Toyama」という文字
⑥ブルプラ	「BLUE-PRIDE」という文字
⑦No Retreat	「No Retreat No Surrender」という文字
⑧トヤマ	「TOYAMA」という文字
⑨髑髏	ハットを被った髑髏のイラストと「TOYAMA CITY ULTRAS」という文字
⑩Vivacioas Party	女性の目と鼻のイラストと「Vivasioas Party」という文字
⑪ターゲット	的のイラストと「TOYAMA style」という文字
⑫ジョーカー	映画「ダークナイト」のジョーカーというキャラクターのイラスト
⑬墓	「ゆりかごから墓場まで」赤ちゃん・子供・大人・老人・墓のイラストにクラブカラーのマフラーが巻かれている
⑭ボブ	歌手・ボブマーリーの顔のイラストと彼の歌詞の一節
⑮ストーンズタン	ローリングストーンズのロゴとグループのエンブレムを組み合わせたイラスト
⑯プロレス	髑髏のイラストと「FRENTE TOYAMA」という文字

(図 2：横断幕)



横断幕の考案や製作は中心メンバーである山口さんが担当している。山口さんは横断幕を張る意味について、「幕がある限り俺たちは常にここにいる」という存在証明のためだと語る。富山の横断幕が張られている場所にサポーターは集い、その場所は一瞬にしてカタール・富山サポーターだけの応援席と化す。①(グループ名)や②(グループ名)、③エンブレムなどグループ名やエンブレムの入った幕はメンバーにとってはとりわけ重要な意味を持ち、自分たちがその場所にいること、そしてその場所で応援していることを誇示するものとなっている。

加えて横断幕は基本的に「青・紺・白・赤」のクラブカラーを元に作られており、横断幕が張られたエリアは、一気にカタール・富山の色に染まることになる。

横断幕の特徴としては「やんちゃ」(「やんちゃ」は後に述べるように、中村さんが好んで使う言葉であるため、本論文でもこの言葉を使用することとする)なデザインが挙げられる。⑨髑髏や⑩プロレスには中央に髑髏のイラストが大きく描かれており、また⑦No Retreat の「No Retreat No Surrender (撤退も降伏もしない) や⑩プロレスに書かれている「FRENTE (解放戦線)」など文字の内容も過激で先鋭的なものとなっている。

③ファッション

ほとんどのサポーターは試合中カタール・富山のユニフォームを着て応援しているが、グループ T のメンバーはグループのオリジナルグッズを身に付けて応援している。

その最たるものが T シャツである。これまで T シャツは数種類作られており、ベースの色は主に「黒・紺・青・白」の 4 種類である。試合中どの T シャツを着るのか、あるいはカタールのユニフォームを着るかどうかはメンバーの判断に委ねられているが、多くのメンバーが T シャツを着用し、中でも黒色系の T シャツを着て応援している場合が多い。

(図 3 : T シャツ)



図 3 はグループ T の T シャツの一例である(黒塗りの箇所はグループ名が書かれている)。ベースカラーは紺色である。表側(左)はシンプルなデザインで、中央にグループ名が赤色・白色で書かれている。一

方裏側（右）は表側に比べて凝ったデザインとなっている。一番上にはグループ名がブラックレターのフォントで書かれている。その下には3つのイラストが並んでおり、中央にはグループのエンブレム、左側にはエンブレムの両隣に髑髏が描かれたイラスト、右側には「TOYAMA CITY ULTRAS」の文字とともに帽子を被った骸骨のイラストが描かれている。その下には「No Retreat No Surrender（撤退も降伏もしない）」というグループTが大切にしている言葉が書かれている。続いて「TOYAMA CITY ULTRAS」「KENSO GATE B7」「MAIDOHAYA FOOTBALL」といったグループTを象徴する場所や言葉が書かれている。

（図4：スカーフ）



同様にスカーフも重要なアイテムとなっている（図4）。スカーフの表側（上）は青・紺色のストライプがベースとなっており、中央にはグループ名とロゴ（黒塗りの箇所）が大きく書かれている。両側には「TOYAMA CITY La 12」という文字が小さく書かれている。「La 12」はスペイン語で「サポーター」を表す。裏側（下）は青・赤色のストライプがベースになっており、中央には「Barra Brava de Toyama」という文字が白色で大きく書かれている。「Barra Brava」はスペイン語で「過激派サポーター集団」を意味する。両側には「BOYS TOYAMA ULTRAS」の文字が書かれている。

上記のようなTシャツやスカーフ以外にも、MA-1や迷彩柄のアウター、ワッペンやシールなど様々なオリジナルグッズが存在し、メンバーはそれらを身に付けて応援している。

グループTのオリジナルグッズの特徴は主に次の2点である。

1点目は「グループTとしての存在の誇示・主張」である。Tシャツやスカーフにはグループ名やエンブレム、グループの象徴的な言葉や場所が多分に組み込まれており、グループTの存在をこれでもかというほど主張している。また同様に強く主張されているのが「ウルTRASとしてのグループT」である。グッズには「TOYAMA CITY ULTRAS」や「BOYS TOYAMA ULTRAS」といった語句が多く書かれており、そこからは自分たちはウルTRASだというメッセージを汲み取ることができる。

2点目は「やんちゃ」なデザインである。横断幕と同様、グッズにも髑髏や骸骨といったイラストが多く組み込まれており、文字のフォントも海賊を連想させるような尖った印象を持たせるブラックレターのフォントが多用されている。またMA-1や迷彩柄のアウターというアイテム自体からも、やんちゃで、ある

種男性的な要素が感じられる。

サッカー色の強いチャント、「やんちゃ」なデザインの横断幕やファッション、これらがグループ T の応援の構成要素であると言える。

第 2 項 他のサポーターから見たグループ T の応援

以上グループ T の応援の様相について分析したが、彼らの応援は他のサポーターからはどのように受け止められているのか。本項ではフィールドワークを通して出会った 2 人のサポーターの語りと、筆者自身の経験を基に他のサポーターから見たグループ T の応援について分析する。

1 人目は 10 年以上ゴール裏で応援している 50 代の男性サポーター A さんである。まず A さんはグループ T のメンバーについて「仕事をしながらあれだけ毎試合アウェーに行くのは凄い。あの人らみたいに応援しろと言われたらできない」と語り、ほぼ全試合（2019 シーズンは全 34 試合）応援に駆け付けるメンバーのクラブに対する情熱に感心した様子を見せた。さらに応援については「若い人のアップテンポな応援」という言葉で 10 代 20 代の若いメンバーがリードするグループ T の応援を評した。しかしその年齢の違いがネックとなってか A さんはグループ T のそばにはなかなか行きづらいとも語った。また A さんは昔のゴール裏と現在のゴール裏を比較し、「家族連れとか年齢層が高い人は昔の方がいっぱいいたから、昔の方が親しみやすくはあったかな」と語った。

メンバーと親交がある 20 代の女性サポーター B さんは、ゴール裏二階に女性サポーターが少ないことについて、「ガラは悪いよね。私は知り合いだから男臭いのは気にならんけど、初めて来た子とかは服脱いでるのとか見たら『うわっ近寄らんとこ』ってなるかも」と語り、メンバーが上半身裸になったり、激しくブーイングを行うといった男性的なノリは女性には合わないことを示唆している。またグループ T の応援については「若い子多いし今どきの応援って感じ。J リーグの応援っていったらこれっていう」と語り、グループ T の行う応援が他の J リーグクラブと比べても遜色がない応援であると感じているが、一方で昔の富山の応援っぽさはかなり少なくなったと語った。

筆者がグループ T に対して感じていたのはグループ T の「異質さ」である。10 代 20 代の若者がカターレのユニフォームではなく T シャツを着て応援する姿や、選手に対しても激しくブーイングするといった応援方法は他のサポーターには見られないものであり、その様子を見る度に「なぜクラブを応援しているのにユニフォームを着ないのか」「なぜ応援している選手にブーイングするのか」といった否定的な感情を抱いていた。また彼らのスタジアムでのコミュニケーションは「内輪ノリ」のようにも感じた。そのためグループに入る以前はグループ T と筆者との間に見えない壁があるように感じていた。しかしその一方で、メンバーが心の底からスタジアムでの喜怒哀楽を楽しんでいる様子が羨ましく思えたのも事実である。

以上のように、グループ T が行う応援について、「あれだけ熱心に応援するのは凄い」や「今どきの応援」といった肯定的な見方が存在する一方で、彼らが行う若者の男性的な応援方法やノリは女性や中高年などのサポーターにとっては完全には受容し難いものになっているという側面もあるようだ。

第3項 応援の背景にある想い

グループTの応援にはサッカー色の強いインターナショナルなチャント、「やんちゃ」なビジュアルの横断幕やファッションといった特徴があり、またメンバーは若い男性的なノリで熱く、楽しく、時に激しく応援を行っていることが明らかになったが、彼らのそのような応援の背景にはどのような想いや考え方が存在しているのだろうか。本項ではグループTの応援の背景について分析する。

① かっこいい応援をしたい

グループTの応援の背景にあるものとしてまず挙げられるのが、「かっこいい応援をしたい」という強い想いである。中村さんはそれについて以下のように語る。

とりあえずこんなクソ田舎の弱小3部クラブでもかっこいい応援したいやん！

ウルTRASっていうか、本当にガチガチな応援してるグループっていうのは男としてはかっこいいよね。ロマンがあるっていうかさ。あと根本的にあれじゃん、応援してたら一生チームに対して関われんじゃん。それっていいなって思ったから。

以上のように、カターレ富山がたとえ地方の田舎クラブであり、リーグ下位の弱小クラブだとしても、応援は「かっこいい」ものを作り出したいと中村さんは考えている。そしてその際憧れに近い感情を抱き、応援の参考にしているのが第2章で述べた「ウルTRAS」の応援である。中村さんは「ガチガチ」で熱狂的に応援するウルTRASに対し、「かっこよさ」や「ロマン」といった感情を抱いており、また彼らが生まれてから死ぬまで一生を通して地元のクラブを応援する姿についても憧れを持っている。

そして中村さんのウルTRASへの憧れがグループTの応援に反映されているもののひとつがファッションである。それについて中村さんは以下のように語る。

別にユニフォーム着てちゃダメってことはないけど、根本的にサッカーってユニフォーム着ないと応援できないってわけでもないよね。しかもウルTRASってファッションの要素も入ってくんじゃん。だからかっこいいものとか自分たちで作って着ちゃおうぜって感じのところもある。ちょっと気張ったような感じで見せてさあ。ビジュアルの部分もグループとしては大事にしてもいいんじゃないかな。(中略)ウルTRASってさあ、自分たちの存在を主張するために黒いTシャツとか着るじゃん。グループでやってるよーみたいなの。そういうところにはちょっと憧れがあったから、俺らもTシャツ作ることにした。

以上のように、中村さんは試合中ユニフォームを着て応援することを決して否定はしないが、その一方でかっこいいファッションを身に付けて応援することもサッカー文化のひとつであり、それこそがウルTRASであると考えている。海外のウルTRASは黒色のTシャツを身に纏い、グループとしての存在を主張

しながら応援していると中村さんは語っているが、それと同じようにグループTもグループ名やエンブレムの入った黒いオリジナルグッズを身に付けながら応援している場合が多い。ビジュアルにこだわったファッションを身に纏い、気張ったように振舞うことによって、ウルトラ的なカッコよさを体現していると言える。

「カッコいい応援をしたい」という想いを抱いているのは中村さんだけではない。中心メンバーの一人である山口さんもその想いを共有しており、それは彼が考案・製作する横断幕やオリジナルグッズにも大きく反映されている。それが先述した「やんちゃなデザイン」である。山口さんは以下のように語る。

俺の中では海外とかJリーグのゴリゴリやってるとこの幕とかって粋がったような、カッコつけたような感じのやつが多いイメージ。髑髏とか映画の悪役とか。そういうカッコいい部分は取り入れていきたいよな。

以上のように山口さんは、海外や日本のウルTRASがよく使っているビジュアルを富山の横断幕やグッズにも取り入れている。それは髑髏や映画の悪役キャラといった「粋がったような、カッコつけたような」デザインだと山口さんは語る。髑髏は多くの幕やグッズに取り入れられており、⑩髑髏や⑬プロレスのように髑髏がそのビジュアルの中心として据えられているものもあれば、Tシャツのように髑髏がワンポイントとして組み込まれているものもある。映画の悪役キャラに関しては、映画「ダークナイト」の悪役キャラ「ジョーカー」を模した⑫ジョーカーがそれに該当する。また⑬プロレスに関しても、あるプロレス団体の悪役ユニットのロゴをモチーフに作られているため、ニュアンスは類似していると言える。そして横断幕やグッズに書かれてある文字の中にも悪童的な要素が見られる。フォントはブラケットターのフォントが多用されており、尖った印象や雰囲気演出している。その内容も「No Retreat No Surrender (撤退も降伏もしない)」や「FRENTE (解放戦線)」など先鋭的で過激な文言が目立つ。グループTの横断幕やグッズには、それを見た相手選手や相手サポーターが恐れおののくような、「粋がった」悪童的なデザインが多分に組み込まれており、それこそが山口さんの考える「カッコよさ」であると言える。

しかしそのようなカッコよさを形として具現化することは決して容易ではない。髑髏のデザインにしても、顔や目、骨などそれぞれのパーツごとにイメージに合ったものを選んで最適な形に組み替えなければならない。また完成したものが他のクラブのデザインと酷似していた場合、そのデザインをやむを得ず棄却することもある。その他にも色の配色や文字・メッセージの考案、さらには製作に必要な時間や場所の確保など、様々な要件をクリアすることによって初めて山口さんが納得できるほどのクオリティのものを作り出すことができるのである。横断幕は一見するとただのスタジアムの装飾のように見えるかもしれない。しかしその裏には山口さんの「カッコよさ」に対するこだわりや情熱が詰まっているのだ。

チャントにおける「カッコよさ」は横断幕やファッションとは少し性質が異なっており、「サッカーばい応援」というのが重要な要素となっている。グループTのチャントにはサッカーソングを原曲にしたものが多いと述べたが、それについて中村さんは「それ以前のチャントで魅せられるものって果たしてあった

のかな？って思った。なんかサッカーぽくねーよなっていう」と語った。中村さんらが応援をリードする以前に歌われていたチャントは中村さんにとっては、「サッカーっぽくない、魅せられないもの」だった。グループTが2016年に発足してからは、それまでのチャントを現在のサッカー色の強いチャントに入れ替え、より「サッカーっぽい応援」を行うことを目指したのである。

海外のウルTRASのように横断幕やファッションにおける「ビジュアル」を重視し、そして世界中のサッカーファンが歌っているようなチャントを歌うことで、よりサッカーっぽい応援を行う。このような「カッコいい応援」を行うことはメンバーにとって非常に大きな意味を持っているのである。

② 応援の熱量を上げるために

そして上記のような彼らにとっての「カッコいい応援」は、「応援の熱量を上げる」という目的を達成させるためのひとつの手段にもなっている。

チャントに関して重要なポイントとなっているのが「歌いやすさ」である。先述した通りグループTのチャントは世界的なサッカーソングを基に作られているが、それらは有名でポピュラーであるため、総じて歌いやすい。その歌いやすさによって声や手拍子が揃い易くなり、より大きな一体感を生み出すことができる。それは普段からゴール裏で応援しているサポーターだけでなく、大きな声で歌うことが困難なメイン席で観戦しているサポーターや、初めて試合観戦に訪れた観客も手拍子などを行うことで容易に応援と一体化することができる。チャントがインターナショナルであるということは同時に歌いやすいということを含意し、それは応援の熱量を上げるのに大きく寄与すると中村さんは考えている。

また横断幕やファッションの「やんちゃ」なデザインについても応援の熱量を上げるための一つの作戦であるという。中村さんは以下のように語る。

これは作戦でもあるね。ちょっと「やんちゃ」な人間が集まってきたら面白いよねーみたいな。そういう人間って熱いじゃん。若い子とかそういうの好むじゃん。ターゲットとしては俺らより年下はまじでもっと観客集めようみたいな。しかも若い子は友達とか誘ってきてくれるしね。あと俺らと同年くらいのやつが入ってきたらラッキーって感じだし。

以上の語りから、横断幕やファッションに「やんちゃ」なデザインを用いることで、そのようなデザインを好む「やんちゃ」な人間をゴール裏やグループTに呼び込み、彼らが持つ「熱」を応援にも反映させたいと中村さんは考えている。その中でも特にターゲットにしているのが、中高生・学生といった若者である。「やんちゃ」なデザインは若者にとっての「カッコいい」に繋がり、このようなデザインや雰囲気を好む若者がゴール裏に増えれば、応援の熱量も上げることができると中村さんは考えている。

そしてTシャツなどオリジナルグッズの着用も応援の熱量を上げるための作戦のひとつとなっている。中村さんは「ユニフォームばっかの所って、最初の人って入ってきにくくない？私服でガヤガヤしてるところの方がずっと入ってけると思う」と語っており、初めてゴール裏に来た観客にとってユニフォームを

着たサポーターばかりが集まっているゴール裏に飛び込むのは敷居が高く、難しいことだと考えている。そこでユニフォームではなく私服に近いオリジナルグッズを身に付けることによって、ユニフォームを持っていない人でもゴール裏に入りやすい雰囲気を作っていると言える。その際ターゲットにしているのはやはり若者である。ユニフォームは約 15000 円と学生にとっては高価で手軽に購入できるものではない。そんな若者にとって、ユニフォームではなく、かっこいいビジュアルのファッションを着こなしながら応援しているメンバーの姿は魅力的に映るのではないかと中村さんは考えている。

そしてゴール裏に今よりも多くのサポーター、特に若いサポーターが集まり、それに伴い応援の熱量も上がり、最終的にその熱量がゴール裏からスタジアム全体に伝播していったとき、スタジアムの雰囲気は素晴らしいものになると中村さん、そして中心メンバーの一人である武藤さんは考えている。語りは以下の通りである。

中：一人一人がチーム愛を持って熱く応援するっていうのはかっこいいよね。極論、満員のスタジアムでサポーターが全員で応援しているのが最高にかっこいいし、いい雰囲気だと思うぞ。

武：全体的に熱量が溢れてる応援ってのは理想かな。一人ひとりが当事者意識をもって主体的に応援するみたい。例えば浦和とかはすごいよ。ゴール裏だけでなくメイン席の人らもめちゃくちゃブーイングするもん。(中略) 熱く応援すると普段出していない自分、いつもと違う自分って絶対出てくるのよ。スタジアムにいる全員が人が変わるくらい熱く応援できたらかっこいいし、そういう人が変わる場所を作っていきたい。歌とかビジュアルも大事だけど、やっぱり一番大事なのはそこだと思う。

以上のように、中村さんはサポーター一人ひとりがカターレ富山に対して愛を持って熱く応援するのは「かっこいい」ことだと語り、またクラブ愛を持った多くのサポーターがスタジアムを埋め尽くし、熱狂的な雰囲気が作り出されることについては「最高にかっこいい」という言葉で表現した。

武藤さんは応援の理想の形として「全体的に熱量が溢れてる応援」を挙げた。サポーター一人ひとりが当事者意識を持って主体的に、そして人が変わるくらい熱く応援することでその理想へとより近づくことができ、そのようなクラブに対する情熱や主体性の強さこそが、応援をする上で最も重要であると武藤さんは考えている。

また武藤さんは「熱く応援するといつもと違う自分って絶対出てくる」と述べているが、この「いつもと違う自分」に該当するのが、ブーイングや上半身裸になるといった応援方法ではないだろうか。試合中は筆者自身も、土足のまま椅子の上に登る、親指を下に向けながら激しくブーイングする、得点が入った時には T シャツを脱いで喜びを爆発させるといった、普段の生活では見せないような行為を頻繁に行うが、これはある種の「トランス状態」になっているからである。「選手のために一緒になって戦う」という感覚で熱く応援していくうちに、感情が極度に高ぶり、感情の歯止めが利かなくなって上記の行為に及

んでしまうのだ。これらは前項の B さんの語りの通り、「柄の悪い」ものであることには違いない。しかしそれは「人が変わるくらいの熱い応援」による結果であるとも言える。また中村さんは選手へのブーイングに関して「J2 に昇格するようなチームは負けた時にブーイングしていた。そういうチームが強くなって昇格する」と語り、選手へのブーイングはチームを強くするために必要な要素であると指摘した。

メンバーが求めるカッコよさとは、何もビジュアル的なものだけではない。強いクラブ愛を持って人が変わるくらい熱く、主体的に応援するというサポーターの姿勢も彼らにとってはカッコいいものであり、むしろそれこそが応援する上では大きな意味を持っているのである。熱量が溢れる「熱くてカッコいい応援」を彼ら自身が行いたい、そして応援をリードする立場として、「熱くてカッコいい応援」を通して熱狂的なスタジアムの雰囲気を作り上げたいという想いがグループ T の応援の背景には存在していると言えるだろう。

第5章 3人のメンバーたち

この章ではグループTの3人のメンバーに焦点を当て、彼らの人生においてカタレ富山、そしてグループTがどう交わってきたのかということについて分析する。

第1節 グループTの熱きリーダー～中村さん

まずはコールリーダーの中村さんである。中村さんは富山県出身の27歳である。高校卒業後は石川県内の大学に進学し、現在は富山県内で働いている。

中村さんがカタレ富山と初めて出会ったのは高校生の頃だが、当時は熱心に応援していなかった。試合を観に行くと、当時から熱心に応援していた藤田さんを茶化すなどして楽しんでたという。

そんな中村さんだが、大学進学後意外な形で「応援」と接点を持つようになった。それはサッカー日本代表の応援である。サッカー少年だった中村さんは幼い頃からサッカー日本代表に対して憧れを持っていた。また自分の国を応援したいという純粋な気持ちもあって、大学2年生の頃山口さんや藤田さんと共にサッカー日本代表を応援するようになった。

そこで中村さんに大きな衝撃を与えたのが「ULTRA'NIPPON (ウルTRASニッポン)」である。ウルTRASニッポンとは日本代表の応援をリードするサポーター集団のことであり、その歴史はJリーグ開幕前にまで遡る。「サポーター」という言葉がそれ程一般的ではなかったその当時、ウルTRASニッポンが日本代表を応援するために日本国内そして世界各国を飛び回るその姿は世間に大きなインパクトを残し、サポーターの存在を日本中に普及させる一因となった。ウルTRASニッポンとは以下のような集団である（ウルTRASニッポン公式HP 2019より）

ウルTRASニッポンとは、日本代表チームを応援するサポーター集団のこと。日本代表の試合がある日には、その会場がどこであろうと駆けつける。日本国内は言うまでもなくアジア、中東、欧州、南米。その場所がどこであっても、日本代表の試合があるスタジアムにはウルTRASニッポンの横断幕がスタンドに掲げられる。

ウルTRASニッポンは組織ではない。会費もなければ、入団手続きなんてものもない。極論を言ってしまえば、単なる気の合った者同士が集まっているだけである。ウルTRASニッポンという名前だって、何かを意図してつけたわけではない。応援歌のCDを出すときにレコード会社側から「何かグループ名をつけてください」と言われたので、つけただけ。今でこそこの名前で10年以上も活動しているから思い入れはあるが、基本的には名前なんて何だっていい。日本代表が活躍し、日本サッカーが盛り上がればそれでいい。

とにかくサッカーが好きで、だからこそ自分たちの国のサッカーも盛り上げたい。とにかくその一心で、活動している。どれだけの力になっているかはわからないが、とにかく日本代表の力になりたい。その思いから、スタンドで声を張り上げている。

ときには、怒る。選手がヘタでミスをするのなら許せるが、力を出し切っていない選手は許さない。日の丸をつけてプレーする以上は、甘えは許されない。サポーターがそれを許してしまったなら、そこからチームは弱くなる。そう確信している。

いつの日か、日本代表のキャプテンにワールドカップの優勝トロフィーを誇らしげに掲げて欲しい。いつの日か、サッカーの話題をするだけで誰とでも友達になれるような、そんな日本になって欲しい。そう願いながら、今日もスタンドで「ニッポン！」と叫ぶ。

そう願っている人間が集まった、単なる集団。それがウルTRASニッポンだ。

以上のように、日本代表の試合がある日には世界の果てまで駆け付け、「自分たちの国のサッカーを盛り上げたい」「とにかく日本代表の力になりたい」という一心で必死に声を張り上げ、全力で応援するウルTRASニッポンの応援を見て、中村さんが感じたのは「かっこいい」という純粋な感情だった。そしてこれが「すべての始まりだった」と中村さんは語る。それ以降札幌や新潟、横浜など日本各地を飛び回り、サッカー日本代表を応援するようになった。また後にグループTの応援の主要な要素となる「ウルTRAS」の存在を初めて知ったのもこの時である。ウルTRASニッポンとの出会いは中村さんにとっての応援の「入口」であり、また応援の「かっこよさ」に魅せられた瞬間でもあった。

そしてそれと同時に芽生えたのが「富山の為に応援したい」という情動だった。ウルTRASニッポンのメンバーを含む多くの日本代表サポーターは、日本代表だけを応援しているわけではない。普段彼らは愛着を持つクラブを熱心に応援している。彼らの姿を見て中村さんは「自分も地元のクラブを応援したい」と思うようになった。当時中村さんはカタール富山の試合運営のアルバイトをしていたことも相まって、地元のカタール富山への愛着が強くなり、そして2014年、中村さんは大学4年生のときにカタール富山のゴール裏で応援するようになった。

大学4年生と言えば就職活動の時期だが、中村さんは当時富山から出るつもりは全くなかったという。「普通に地元でおればいいやって考えだったから。楽し、カタールも見に行けるし。あと一応長男やからどうせ家におらんなんやろなあって」。中村さんにとってその後の人生を富山で歩むことはある種既定路線のようなものだったが、社会人になってカタールを熱心に応援するようになるとその考えは変化していった。応援で全国を飛び回るようになり、東京など大都市の空気を吸うことも増えた。学生時代のほとんどを北陸という田舎で過ごした中村さんにとって東京は全くの別世界であり、色々な人、モノが集まる最先端の街だった。中村さんはこのとき初めて「大学生のうちにもっと違う世界を見ておけばよかった」と若干の後悔を感じた。もし学生のうちから様々な世界を見ていたとしたら自分の価値観や考え方、さらには今いる場所も違っていたかもしれないと中村さんは語る。

そして2016年、中村さんが社会人2年目の時にグループTを結成した。中村さんはその年から他のメンバーと共にゴール裏の応援をリードすることになるのだが、その際心の中にあったのが「富山のために」という強いクラブ愛・地元愛と、「田舎だからと言ってダサい応援はしたくない」という想いだった。中村さんは以下のように語る。

富山みたいな田舎って、新しいものとか相当遅れて入ってくるやん。東京で流行ったものでも富山に入ってくるのはその半年後とか。こういう時間のロスってサッカーの応援にも当てはまると思う。関東のクラブのやつらは最先端の応援してるかもしれないけど、俺らは「関東のやつら何しとるんやろ」って探してそれを取り入れるってなったらやっぱりワンクッション挟んじゃうし。(中略)でもだからと言って時代遅れのダサいことはしたくないしさあ。だから流行りのものはなるべく早く取り入れたいなあって。

以上のように、都会で流行したものが富山のような田舎では遅れて流行するのと同様に、サッカーの応援についても最先端の応援をタイムロスすることなく富山に導入するのは難しいと中村さんは考えている。しかしだからといって時代遅れの「ダサい」応援をするつもりは全くない。流行の応援を取り入れるために他のクラブの応援に注視している。それが功を奏した一つの例が「スカーフ」である。それまでは一般的にタオルマフラーが応援アイテムの主流だったが、数年前から海外ではスカーフがそれに代わって徐々に流行していた。そして日本国内のいくつかのクラブもスカーフを取り入れ始めたのだが、中村さんらはその変化を察知し、早い段階でスカーフをオリジナルグッズとして使い始めたことで、その流行を先取りすることが出来たのである。

他にも中村さんらは、それまでカターレ富山の応援にはなかった要素を次々に取り入れていった。まずグループを結成し「ウルTRAS」として応援をリードするようになった。それに伴い横断幕や彼らのファッションもウルTRAS的な文化に基づいた悪童的なデザインに変化させていった。そしてその際最も大きな変化を施したのがチャントである。応援の花形とも言えるチャントを「よりサッカーっぽいもの」にするために、かつてサポーターの間で人気だったいくつかのチャントを廃止し、それに代わってインターナショナルなチャントを富山にも導入していった。

上記のような様々な「改革」を行った中村さんらだが、それらは順風満帆に進んでいったわけではない。「富山っぽさがなくなった」や「柄が悪い」といった批判を受けることが多々あったという。その中でも他のサポーターからの信用が離れていると目に見えて感じたのは、ゴール裏のサポーターの数の減少であった。2016 年以降ゴール裏のサポーターの数は徐々に減少し、2018 年にはその数はそれ以前の半分ほどにまで激減したという。

しかしそのような逆境に立たされながらも、目指すべき応援のために中村さんらはやり続けた。その甲斐もあって4年目の今年は批判されることもめっきり少なくなり、ゴール裏のサポーターの数もシーズンが進むにつれて増加していった。特に顕著だったのが若者のサポーターの増加である。中学生から大学生まで、今年からゴール裏で応援するようになった若者が急増した。そしてそのうちの何名かは今現在グループTのメンバーとなっている。若者は中村さんらがターゲットにしていた層であり、約3年に渡ってやり続けたことが実を結んだ結果だと言えるだろう。

それでも中村さんは「家で例えるならまだ土台ができたくらい。骨組みとか外装とかはまだまだこれからだよ」と語り、目指している応援にはまだまだほど遠い状況にあると考えている。しかし中村さんの情熱は衰えることはなく、これからもカターレ富山の応援をリードしていく。

第2節 残り少ない時間の中で～藤田さん

次は藤田さんである。藤田さんも中村さん同様27歳で、現在は富山県内の会社に勤めている。グループTの中心メンバーの多くは彼らが大学生になってからカタレ富山を応援し始めたが、藤田さんはカタレ富山発足当初から熱心に応援している。

初観戦は中学卒業直前の3月で、その試合で富山県総合運動公園陸上競技場に一万人の大観衆が集まり、「サッカーでこんなに人が集まるもんなのか」と衝撃を受けたという。この試合で試合観戦にハマり、高校生のときには部活やテスト期間と被らない限りはスタジアムに足を運んでカタレ富山を応援していた。

高校卒業後は愛知県内の大学に進学し、愛知県内に居ながらもカタレの試合には最低でも月1～2回の頻度で足を運んでいたという。そしてそれに加えて応援していたのが「名古屋グランパス」というJ1リーグの強豪クラブであり、このときの経験が藤田さんの応援の価値観を大きく変えることとなった。それについて藤田さんは以下のように語る。

ゴール裏の中心部の殺気立った雰囲気を感じて、純粋に「J1ってここまでせんとだめなんだ…」って思った。本当「にわか」が近寄れんような雰囲気。俺も何回か中心の近くで応援したことあるけど、もう本当怖くて、軽い気持ちじゃ近寄れん。試合中飛び跳ねないやつがおかしいって感じで、それをリーダーの指示でやるんじゃないくて周りの人が自然にやってたのがすごかった。あと名古屋のゴール裏なんてシーズンチケット持ってないと入れないから本気で応援する人しか集まってない。応援場所確保するために前日とか早朝から場所取りしてるのとかも、富山じゃあり得ない光景だったよ。

あとカップ戦の消化試合で観客が4000人くらいしかいなかったときはメイン席はガラガラやったけどゴール裏は人いっぱいであつた。「試合は試合で切り替えて、絶対これからのリーグ戦につなげるんだ。消化試合で終わらすな！」みたいな感じでリーダーの人が煽ってたりしてね。他にもACL（アジアチャンピオンズリーグ）の予選とか天皇杯のトーナメントの緊張感とか、色々いいもん見れたとは思ってたね。（中略）旗の多さだったり飛んでる人が多いとか、手拍子が頭の上で綺麗にそろってるとことだったり単純にかっこよかったわ。

以上のように、藤田さんは名古屋グランパスのゴール裏に行って初めて「J1の応援」を体感した。そこには「富山じゃあり得ない光景」ばかりが広がっていた。藤田さんによると、名古屋のゴール裏はシーズンチケットを持つサポーターの先行入場によって座席の半分以上が埋まってしまい、また彼らはより良い応援場所を確保するために試合当日の早朝、あるいは試合前日から入場の待機列に並んでいるという。名古屋のゴール裏には、このようなクラブを本気で応援しているサポーターばかりが集まっており、それは富山では考えられないことだと藤田さんは語った。またゴール裏の中心部には藤田さんが「本当怖い」

「にわかには近寄れない」と語るほど殺伐とした雰囲気形成されていたという。試合中は飛び跳ねるのが当たり前で、また ACL や天皇杯といったトーナメント制の大会ではよりピリピリした緊張感が漂っていた。このような名古屋の応援を見て藤田さんが感じたのは「J1 ってここまでせんとだめなんだ…」という想いだった。また彼らのたとえ消化試合であっても本気で熱くクラブを応援する姿や、ゴール裏にひしめく大量のフラッグ、ほぼ全員が飛び跳ね、手拍子を頭の上で行い、それが綺麗にそろう様子などは藤田さんの印象に強く残った。

その他にも、日本で開催された「FIFA クラブワールドカップ」という大会で南米の強豪クラブのゴール裏に潜入したり、中村さんや山口さんらと共に日本代表を応援したりするなど、藤田さんは大学生の間にカタール以外の「外」の応援を身をもって体感した。クラブを熱く応援するサポーターのかっこよさ、殺気立った雰囲気、緊張感、応援の一体感、そのどれもが富山では経験したことのないものだった。そしてこのとき藤田さんが感じたのが、「富山の応援このまじじゃまずくね？」という当時の富山の応援に対する強い危機感だった。

大学卒業後、藤田さんは富山県内のとある会社に就職することになったのだが、それには少し変わった事情があった。というのも藤田さんの実家は自営業を営んでおり、藤田さんは将来的にはその家業を継ぐことになっているのである。就職先もその家業に関連した会社であり、いつかは現在勤めている会社を退社し、それ以降は家業を継ぐための準備に入らなければならない。このことについて藤田さんは以下のよう語る。

藤：違うことをやりたかったってのは正直あった。それこそ応援で日本全国に行って色んなものを見てるわけだし。でも自分の選んだ道だからそこは今ではもう割り切ってるよ。

渡：そういう感情を応援で埋め合わせというか、カバーしている部分はありますか？

藤：それはちょっと違うかな。カタール観に行って埋め合わせだとか、現実逃避してるわけではないよ。応援はただ単に趣味としてだし。もちろん家業を継いでしまったら今みたいな感じでは行けなくなってしまうけど、ただやっぱりこの先長くカタールは応援してると思うし、将来的には仕事しつつもホームゲームは観に行きたいなって感じではある。

以上のように、藤田さんは以前までは家業以外の仕事をしてみたいという想いはあったものの、今では完全に家業を継ぐ覚悟を決めており、この先の人生を富山で歩んでいく決断を下した。家業を継いだ場合、グループ T の応援の中心として様々な活動をしたり、また遠いアウェーの試合に行くことは困難になるが、それでもホームゲームには足を運ぶなどしてこれから先もカタールを応援していきたいと藤田さんは考えている。

また藤田さんは「結婚」について以下のように語る。

結婚願望はもちろんあるよ！30歳までにできたらいいな（笑）いずれ結婚して家庭を持つようになると、ほとんどの人が応援中心の生活から、グループの奴らだったら応援の中心から離れる日が必ず来る。もちろん今の生活は楽しいし、周りの人にもめちゃくちゃ恵まれてるよ。でもやっぱりずっと独身は嫌だし、そこは誰もが割り切って覚悟決めんといかんなとは思ってる。

以上のように、藤田さんは「結婚願望は当然ある」と語り、また結婚はサポーターとしての応援中心の生活に大きな影響を与えるだろうと語った。グループTのメンバーの場合、結婚をして家庭を持つようになると、応援の中心としてアウェーを含むほとんどの試合に駆け付けたり、日ごろの多くの時間をこれまで通り応援（アウェーへの遠征や横断幕・チャントの製作なども含む）のために割くことは極めて困難になるだろう。藤田さんは今の応援中心の生活や、周りのメンバーとの関係性について大変満足しているが、それでもその生活からはいつか離れなければいけないという覚悟も持ち合わせている。この語りは、仕事や結婚と、あくまで「趣味」である応援活動との両立の難しさを物語っていると言えるだろう。

いずれにせよ藤田さんはいつかは現在勤めている会社を退社し、実家の家業を継ぐことになる。残された少ない時間の中で、藤田さんは変わらずにグループTの中心として熱くカタールを応援し続ける。

以上、中村さんと藤田さんのサポーター人生について述べたが、ここから推測されるのが、「外」での応援経験がグループTの今の応援スタイルに大きな影響を及ぼしているという点である。中心メンバーである中村さんと藤田さんに共通しているのは、カタール富山よりも大規模なチームでの応援経験である。中村さんは日本代表の応援を、藤田さんは名古屋でJ1の応援をそれぞれ学生時代に経験し、そこでカタールのゴール裏にはない雰囲気や応援方法を目の当たりにした。中村さんらはそれに衝撃を受けることになるのだが、それと同時に感じたのが当時のカタールサポーターの応援に対する違和感や危機感だった。2人の上記のようなカタール以外での応援経験は、彼らが「熱くてカッコいい応援」を行う大きなきっかけのひとつになっていると考えられる。

第3節 ゴール裏が大切な居場所に～手塚さん

手塚さんは若手メンバーの一人で、今シーズンからグループTの一員となった。現在は富山県内の大学に通っており、来年からは富山県内の企業に就職することが決まっている。

手塚さんはカタール富山のJFL初年度である2008年に一時期カタールを応援していたが、翌年以降はチケットの価格の上昇などによりスタジアムに足を運ぶ機会は一気に少なくなった。しかし今年の春、時間があつたので久しぶりに試合観戦に訪れたところ偶然知り合いと出会い、その人がゴール裏で応援していたため手塚さんもその日はゴール裏で応援したという。するとその試合で再び応援にハマり、2019シーズンは多くの試合を現地で応援するようになった。

手塚さんがグループに入ったきっかけは明確なものではなかったという。グループTの近くで応援していくうちにメンバーと顔見知りの関係になり、すれ違う度にお互い挨拶をするようになるとメンバーとの

距離が縮まっていくのを感じた。そしてその後その距離はますます近くなり、夏ごろにグループの T シャツを着て応援するようになると、自身がメンバーの一員であることを自覚するようになった。

そんな手塚さんだが、グループ T に入ったことで自身の応援スタイルや考え方がガラリと変化したという。1 つは「自分の 100% の力で応援できるようになった」ということである。グループに入る以前は 1 人で応援していた手塚さんだが、そのときは周りが知らない人だらけだったことや、自身の感情を表出することへの恥ずかしさもあって、なかなか全力で応援することはできなかった。しかし先述したような熱狂的な応援を行うグループ T の中に身を置くようになると、次第に手塚さん自身もそのような応援スタイルへと変貌し、今では自分の感情を曝け出して全力で応援できるようになったという。試合中は絶えず声を出し前のめりになって選手を鼓舞する。得点が入ったときには最前列まで駆け下り、手すりにまたがって喜びを爆発させることもある。手塚さんはグループ T に入ったことによって、より熱く、そして素直な感情のままに応援するようになった。

そしてもう一つはグループ T が手塚さんにとって重要な居場所になり、それによって生活スタイルが大きく変化したという点である。グループ T は「素を出せる空間」だと手塚さんは語る。メンバーとはお互いが趣味仲間であるからこそ変に気を遣うことなく素の状態で接することができ、またそのような仲間がいるからこそ、他の予定を蹴ってまでスタジアムに足を運んでいるのだと手塚さんは語る。グループ T に入ったことで、ゴール裏は手塚さんにとって感情を表出できる週末の最高の「遊び場」となったのである。

第6章 考察

第1節 グループTの内実—先行研究との比較—

グループTは2016年からカタレ富山の応援をリードし、その中で独自の文化を形成しながら一体となって応援を行っていることが明らかになった。本節ではグループTと先行研究で述べた海外のウルTRASとの比較を行い、グループTの内実について考察する。

まずグループTそして海外のウルTRAS双方の根底にあるのが、「地元やクラブへの強い愛」である。海外のウルTRASは「いつまでもボルドー人」といった言葉を掲げ、バッジなどに街や地方の紋章を書き出すなどして街やクラブと完全に同一化しているが、これはグループTについても当てはまるだろう。

『TOYAMA CITY』ULTRAS』と書かれたファッションを身に着け、カタレ富山のクラブカラーで彩られた横断幕をゴール裏に張り、「勝利奪って帰ろう 俺たちの街 富山へ」という歌詞のチャントを声高らかに歌う彼らの姿は、彼らの故郷である富山や地元のクラブであるカタレ富山への強い愛着、さらには彼ら自身が富山人であるという強い誇りに満ち満ちている。また応援方法についても多くの共通点がある。先述した「キックオフの1時間前からゴール裏に陣取る」「応援席を横断幕を覆う」「マイクを持つリーダーが歌をリードする」といった海外のウルTRASの応援方法はグループTにも当てはまり、それに加え中村さんらは海外のウルTRASの他の応援の要素についても彼らの応援に取り入れている。その一例が第4章で述べた「粋がったやんちゃなデザイン」やグループT独自のオリジナルグッズである。横断幕やオリジナルグッズには髑髏や映画の悪役キャラといった海外のウルTRASが頻用する悪童的なデザインを取り入れ、またスタジアムではグループTを象徴する文言や「ULTRAS」の文字が記されたオリジナルグッズを身に纏うことで、彼らは「ウルTRASとしてのグループT」の存在を主張しているのである。

一方でグループTが海外のウルTRASと決定的に異なっている要素も存在する。それは「敵の不在」であり、そこから派生する「排他的な一体感」の欠如である。海外のウルTRASの場合、相手サポーターや自チームの他のサポーターグループなど、様々な敵対関係が常に存在しているため、その中で自分たちの優位性を誇示しようとする意識が発生する。グループ外は「敵」とみなして激しく蔑み、グループ内では常に自分たちこそが優れているのだと勝ち誇る。このような「排他的な一体感」が海外のウルTRASの結束を非常に強固なものにしており、その中でメンバーは「自分たちのグループのために」という行動規範のもと、様々な活動を行うのである。海外のウルTRASとは対照的に、グループTには上記のような敵対関係は存在しない。ゴール裏のサポーターグループはグループTのみで、J3リーグで特別意識している相手サポーターグループも存在しない。そのような状況の中で彼らが形成しているのが「自由な規律」である。グループTには年会費や会則といったルールや権威的な地位・役職などは存在せず、またヒエラルキーや上下関係についても緩やかなものになっている。その背景には「がつつにルールを決めると応援に義務感を感じてしまう」という考えがあり、このような開放的で娯楽的なグループTのグループとしての性質は、海外のウルTRASのそれとは大きく異なっていると言えるだろう。

以上のことを踏まえると、グループTは応援方法などについては海外のウルTRASと類似しているものの、グループとしての性質は海外のウルTRASとは大きく異なっていることが分かる。海外のウルTRA

スは「排他的な一体感」によってグループとしての結束を強めていると述べたが、グループTの場合グループの集団性の基盤となっているもの、その結束を強めているものは一体何なのか。

それは「熱くてカッコいい応援をしたい」というメンバー共通の想いではないだろうか。海外のウルトラスのようにビジュアルにこだわり、カッコいいファッションを身に付け、カッコいい横断幕とともにゴール裏に陣取る。そしてカターレ富山に対する強い愛情と「自分たちも選手と一緒に戦っているんだ」という強い主体性を持って選手を熱く応援する。このような「熱くてカッコいい応援」を自ら行いたいという願望、そして「熱くてカッコいい応援」をすることによってゴール裏の応援の熱量を上げ、熱狂的なスタジアムの雰囲気を作り上げたいという大きな目標をグループTのメンバーが共有しているからこそ、グループTのグループとしての結束は強固なものになっていると考えられる。グループTの根本にあるもの、それはクラブや富山、そして応援に対する猛烈な熱量であると言える。

第2節 グループTの存在がメンバーにもたらすもの

本節ではグループTの存在がメンバーのアイデンティティにもたらす影響について、第5章で述べた3人のメンバーの語りを基に考察する。

1つ目に考えられるのが「未知の自分との出会い」である。グループTの根本にある溢れんばかりの熱量は、メンバーにそれまでの自分にはなかった新たな一面を見出させる機会を作るのである。若手メンバーである手塚さんの場合、それは「感情をありのままに曝け出す自分」であった。手塚さんはグループに入る以前は恥ずかしさもあって試合中100%の力で応援することができなかったという。しかしメンバー全員が熱狂的に応援するグループTの中に身を置いたところ、手塚さん自身も他のメンバーと同じような応援スタイルに変貌し、今では自分の感情を曝け出して熱く応援することができるようになったのだ。第4章第3項で武藤さんは「熱く応援すると普段出していない自分、いつもと違う自分が絶対出てくる」と語った。グループTには中高生・大学生といった若者のメンバーが多く、彼らは普段学校や家庭など、ある種間々とした環境の中に身を置いているに違いない。そのような状況の中で他のメンバーと共に感情を爆発させながら熱く応援し、「いつもとは違う自分」を認識することができるグループTでの一瞬一瞬は、スタジアムの中だけでなく、普段の彼らの日常生活においてもプラスの影響を与えているということが考えられる。

そして2つ目に考えられるのが「故郷で誇りを持って生きていくための原動力」である。メンバーが行う「熱くてカッコいい応援」は、彼ら自身の中での富山の価値を、1つも2つも引き上げるのではないだろうか。中村さんや藤田さん、山口さんなど中心メンバーの多くは2016年に応援をリードする以前に、日本代表やJ1のクラブなど、カターレ富山よりも遥かに大規模なチームでの応援を身をもって体感した。そのとき目の当たりにした雰囲気や応援方法、ウルトラス的なカッコよさ、熱く主体的に応援するサポーターの姿は彼らに大きな衝撃を与えたと共に、「このままじゃ富山の応援まずい」という当時の富山の応援に対する危機感を感じるきっかけにもなった。

サポーターがカターレ富山を応援する理由の最たるものは、「富山に愛着があるから」「地元のクラブだから」といった故郷富山への愛着であろう。これは中村さんや藤田さん、そして筆者も同様である。しか

しだからと言って、故郷や応援しているクラブを完全に肯定できるサポーターはほんの僅かであるに違いない。富山のような地方の下位クラブの場合、どうしても「田舎」「娯楽が無い」「弱い」「J3」といった悲観的な言葉が付随してしまう。また中村さんのように「都会への憧れ」を心の隅に置きながら富山で生活していることもある。それでも中村さんは「こんなクソ田舎の弱小クラブでもかっこいい応援したいやん！」と語る。「たとえ自分の住む街が田舎の地方都市で、応援するクラブが下位リーグで燻っているとしても、応援は上のクラブに負けないような熱くてかっこいい応援をしてやるんだ」という気概や情熱は、メンバーが富山で生活する上で大きな活力となっているに違いない。そしてその応援が達成されたとき、彼らにとってのクラブ、そして富山の価値は今まで以上に高まり、強い誇りを持ちながら故郷富山の人生を歩むことができるのではないだろうか。

先述した通り、グループTのメンバーはクラブや富山、そして応援に対する強い熱量を共有し、その中で「熱くてかっこいい応援」を行っている。しかし彼らがグループTに対して感じている価値や意義は決して様ではない。「未知の自分との出会い」や「故郷で誇りを持って生きていくための原動力」、その他の様々な価値や意義を見出しながら、そしてそれぞれがそれぞれの想いを投影させながら、グループTの一員として応援を行っているのである。

第3節 応援文化とその展望

恐らく多くの人にとってサッカーと言われて思い浮かべるのは、11人対11人の「スポーツ」としてのサッカーだろう。Jリーグクラブのない県で育ち、小学1年生から高校3年生までサッカーに励んできた筆者自身も、長らくピッチ内で行われるスポーツとしてのサッカーしか知らなかった。しかしピッチの外でグループTのメンバーが享受しているのは、筆者が知っていたそれとは全く違う形でのサッカーだった。愛するクラブや富山のために、そして「俺たちは富山人だ」という強い誇りと共に、喜怒哀楽を表出しながら熱く全身全霊で応援する。その際「かっこよさ」も重要な要素であり、かっこいいビジュアルのファッションに身を包み、サッカー的なかっこいいチャントを歌うことで彼らの若者としての欲望を満たす。試合以外でも行動を共にし、ビールやスタジアムグルメを片手に持ちながら気の合う仲間と共にサッカーのある週末を全力で楽しむ。彼らがピッチの外で謳歌しているのは、応援や郷土愛、ファッション、音楽、娯楽など様々な要素が交錯した、「カルチャー」としてのサッカーである。

そして「カルチャー」としてのサッカーを謳歌しているのは何もグループTのメンバーだけではない。昔から応援しているサポーター、最近応援の楽しさを知ったサポーター、ゴール裏一階で応援するサポーター、メイン席で応援するサポーター、小さな子供と一緒に応援するサポーター、大きな声は出せないが手拍子などで選手を後押ししている高齢のサポーター、グループTの応援に反感を持っているサポーター、さらにはボランティアとして試合運営を補助しているサポーターなど、スタジアムにいる全てのサポーターが、それぞれの想いや価値観を反映させた独自のカルチャーを持っているのである。そしてそれはグループTのメンバーと同じように、サポーターそれぞれに普段の日常生活を送る上での大きな活力を与えているに違いない。

Jリーグが開幕して以降、バスケットボールやバレーボール、卓球など様々なスポーツがJリーグと同様に「地域密着」を掲げてプロスポーツ化され、近年ではスポーツを「みる」という文化が徐々に浸透しつつある。Jリーグが目指してきた「豊かなスポーツ文化の醸成」が地域社会に根付き、それぞれのスポーツに合った応援文化が誕生し、その中でより多くの人が「カルチャー」としてのスポーツの楽しみ方を享受できるようになったとき、地域社会は郷土愛や活力、誇りに満ちあふれた、活気のある空間へと変貌するのではないだろうか。

参考文献・URL

- ・ 清水論,2001,「サポーターカルチャーズ研究序説」スポーツ社会研究 9 巻 P1-11,129
- ・ 二宮雅也,2004,「サポーターカルチャーの広がりー『コンサドーレ札幌』サポーターの実践から」鈴木
守・戸莉晴彦編,『サッカー文化の構図ー熱狂の文化装置論』道和書院
- ・ ボダンドミニック (陣野俊史・相田淑子訳),2005,『フーリガンの社会学』文庫クセジュ
- ・ J リーグ,2019,「J リーグ百年構想とは」
<https://www.jleague.jp/aboutj/100year.html>
- ・ JFA (公益財団法人日本サッカー協会),2019,「サッカーファンとサポーターの違いは？」
<http://www.jfa.or.jp/info/inquiry/2011/11/post-10.html>
- ・ ULTRA'NIPPON,2019,「WHAT'S URTRAS？」
<http://www.ultrasnippon.jp/whats.html>
- ・ カターレ富山,2019
<https://www.kataller.co.jp/ticket/ticket-info>

巻末資料

(チームチャント集)

・「奪取」

富山 富山 富山 オオオオ
走れ 走れ 走れ オオオオ
富山 富山 富山 オオオオ
奪え 奪え 奪え
オオオオオオオー オオオオオオオー
オオオオオオオー オオオオオオオー

・「戦え富山」

さあ 行こうぜ 富山 俺たちと共に
勝利を目指して 戦え富山
イダレ ダレ ダレ オ
オオオ イダレ ダレ オ
オオオ イダレ ダレ オ オオオ

・「俺たちの KENSO」

カタール ラララララララー
勝利を掴もう 俺たちの KENSO で

・「GO WEST」

オーレー オオ 富山 オーレー オオ 富山
オーレー オオ 富山 オーレー オオ 富山

・「バモバモ」

バーモ バーモ バモ 富山
バーモ バーモ バモ 富山
バモー 富山

・「ブラジル」

富山 ラララララララー
ラララララララー
ラララララララー オーオー

・「背中」

俺を熱くさせろ お前の背中で
俺熱くさせる お前のハートを
カアレアレオ カタアレアレオ
カアレアレアレアレ オオオ
カアレアレオ カタアレアレオ
共に勝利掴もう

・「立ち上がって歌おう」

立ち上がって 歌お Oh Oh
俺たちは富山 ラーラーラーラー

・「俺たちの誇り」

カタール富山 俺たちの誇り
愛するこの気持ち もう止められない

・「バモバモス」

バモバモス富山 バモバモス富山
バモス富山 バモス富山

・「心ひとつに」

どんな時も 心ひとつに
俺たちは歌う 富山の歌を

・「勝利奪って帰ろう」 ※アウェイ専用

戦えバモカタール 俺たちはここにいる
勝利奪って帰ろう 俺たちの街富山へ